集中 OPINION

被災者の辛い思いや痛みを記録し災害に強い新たな街作りに活かす

廣井 悠

東京大学 先端科学技術研究センター
東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻
教授

今年は関東大震災から100年目の年に当たり、改めて防災体制や災害に強い街作り等が議論された。2011年の東日本大震災の記憶も未だ新しく、首都直下地震や南海トラフ地震も近い将来必ず起きると言われる中、災害への備えを怠る事は出来ない。医療機関も、どの様に医療を継続するのか、体制を整備しておく必要が有る。今、地震災害に対する研究はどの程度進められ、国や自治体、私達市民にどの様な備えが求められているのか。火災を中心とした災害の研究を専門とする東京大学先端科学技術研究センターの廣井悠教授に、災害研究の実情や求められる災害対策等について話を聞いた。

――防災に関する研究を始められた理由は。

廣井　切っ掛けは卒業論文のテーマに防災を選んだ事です。大学では数学を学び、「数学を使って何かを分析する研究をしたい」と、卒論の対象になりそうなものを図書館で探していた時に見つけたのが、『建築防火』という本でした。建物や都市の火災をどの様に防ぐかについてまとめた本だったのですが、その中に数式を使って火災の進展や現象を記述するテーマが有って、これは興味深いと思いました。本当に偶然の出合いでした。

――災害のデータはどの様に蓄積しているのですか。

廣井　自然災害は頻繁に起きる訳ではないので、1つ1つの災害データは非常に重要です。只、これらのデータや資料は、研究者個人が持っている事が多く、研究者が大学を退官したり、亡くなったりした後、その人が集めた資料やデータをどうするのかという課題が有ります。私の専門分野は火災ですが、火災の中でも、地震火災は滅多に起こりません。大きな地震が起きれば、必ず大規模な火災が起こるという訳ではなく、強風が吹いているとか、平日の昼間や夜など出火し易い時間帯であるとか、幾つかの条件が重なって生します。ですから、地震火災の研究は特にデータが重要です。この為、日本火災学会ではデータ、過去の資料を保存したり、取り組みに進めようとしているところです。報告データは公開されていますが、個々の研究者が持っていますデータを集計し、どう保存して行くかが非常に大きな課題になっています。

続きを読むには購読が必要です

詳しくはホームページをご覧下さい

――日本には災害に関するデータが多いホームページが